

2021年度前期 大学院授業改善のためのアンケート

文学研究科長・専攻代表からのコメント

文学研究科長 土肥 伊都子

今期も前年度に引き続き、コロナ感染拡大防止のために、一部の授業が遠隔で行われた。そのため、自己点検・自己評価も、遠隔授業でも対面授業と遜色ない内容となったかどうかを検討したものが多かった。

まず全専攻の中で大学院生の人数が最も多い心理学専攻では、実習科目のカンファレンスや試行カウンセリングが遠隔授業となった。そのため、対面授業に近づけるための工夫、たとえば応答訓練やロールプレイの検討などをいつも以上にていねいに行なったとのことであった。カウンセリングなど、まさしく「臨床」の仕事を将来行うことになる学生の要望を汲んだ、対面と同様の授業が実施できたことが、自己点検・自己評価から伺われた。

一方、対面方式での授業では概ね高い評価を学生から得られていた。特に大学院生は授業外でも主体的に学習に取り組んだが、それは教員が授業の中で個別の質問や要望に対する丁寧な対応によるものと思われる。

国語国文学専攻の授業は、遠隔では困難な授業内容が少なくないようであったが、対面授業に切り替わってから、それらを補足できたとのことであった。

英語学専攻は大学院生が1名のみであるが、院生からのアンケート回答でも教員の自己評価でも、教員は学生のニーズに叶った授業ができたとの評価であった。

今後も一部の授業は遠隔になる可能性があるが、そのような中でも院生たちの学習意欲が低下することのないよう、昨年度からの経験を生かしてさまざまな便宜を図り、大学院生にとって有意義な授業となるべく引き続き努めて頂きたい。

言語科学専攻代表 西垣内 泰介

【全体的評価】

博士課程の演習授業は担当教員・学生ともに各自の研究内容を発表し、また各自の現在の研究内容に関連する重要文献をともに読むことを交替で行い、博士論文の完成にむけて意見交換、助言を互に行う、さらに最先端の学界の情報を提供しあうことなどが目標であり、これらの目標は一定の成果につながっていると思う。

【授業内容について】

授業参加者が平等に発表する機会が与えられ、バランスよく成果が共有できることが理想であり、そのような展開を心がけた。また担当者の進行中のオリジナルな研究を示すことで学生の参考になることが望ましい。

授業によって研究に刺激が与えられることが望ましく、その成果はあったと思われるが、学生の研究の進捗のしかたによって授業への取り組みの積極性に差が出てしまう。

博士課程の研究指導は、学生の研究の評価と的確なコメントによって研究の方向付けをすることがもっとも大切なことであり、今後も心がけていくべきことである。それには指導教員が研究を積極的に行っていることが必要である。

英語学専攻代表 Philip Spaelti

提出された評価から判断すると、学生は提供されたクラスの質に概ね満足しているようである。特に注目すべきは、質問(5)、(6)、(12)のスコアで、教師が生徒のニーズに十分に対応していることを示す非常に高いスコアを獲得した点である。進行中のCOVID-19に起因する困難な状況を考えると、これは特によい傾向といえよう。現在、英語専攻の学生は1人しかいないため、この

結果に対してどの程度の信頼性があるのかは不明である。ただし、直接的なフィードバックも得られており、それはこの結果と一致しているようである。教員による自己評価も、学生のニーズに注意を払っていることを示している。今年度終わりには教員の1名が英語専攻を去る予定であるが、こうした傾向が今後も継続することが強く望まれる。なお、英語専攻では今年カリキュラムに大幅な変更を加えたため、今年評価されたクラスは次年度には開講されることはない。

国語国文学専攻代表 黒木 邦彦

緊急事態宣言発出のため、一時期は Zoom 等で授業を実施する期間があった。その際は、どの教員も Zoom 内で資料を共有しつつ、説明を行っていた。遠隔の制約から十分に提示できなかった資料は対面授業になってから補足的に見せた。授業内容に関しては、学生の学力や関心を鑑み、基本知識の教授を重視した。同時に、自ら問題を発見し、主体的に考える力も養うよう努めた。問題は、学生の学力差が激しいことである。初年度から基礎知識を教授するだけでなく、学習習慣を付けるよう指導しているが、一部の学生には改善が認められない。授業の水準を保つことに教員が苦勞している様子もアンケートからは読み取れる。

心理学専攻代表 大和田 攝子

心理学専攻では、一部の授業は科目の性質上 Web 会議システムを用いた遠隔授業となりましたが、ほとんどの科目で感染防止対策を講じながら対面授業が実施されました。授業アンケートの結果から、これらの授業に対して概ね高い評価が得られており、シラバスに示された到達目標は達成できたのではないかと考えられます。特に、受講生が授業外での学習に熱心に取り組み、その課題に対して授業担当者から十分なフィードバックがあったことや個別の質問や要望に対して丁寧に対応してきたことが、有意義であるとの評価につながったのではないかと思います。

その一方で、「授業によって発言がしにくい」「課題の指示が曖昧である」等の記述が見られ、改善すべき点もいくつか示されました。今後は、受講生が質問や自らの考えを自由に表明できるような工夫や配慮が必要になるとともに、授業外学習に関して明確な指示を出すことが各授業担当者には求められます。授業アンケートの結果をもとに、大学院生の皆さんにとってよりよい学びの場となるよう引き続き大学全体で検討したいと思います。